社会心理学理論の文化的普遍性のために

安藤香織（名古屋大学文学研究科）

今年度のワークショップでは、「社会心理学において文化的要因をとりあげる意義」について、文化をとりあげて研究している者の観点と、それに疑問を抱いている者の観点を闘わせてみたい、という試みであった。

1997年度のアジア社会心理学会では、文化についての研究が非常に多く見られたように、最近では文化に関する研究が活発になってきたように思われる。これらの研究は、主に文化間での行動や認知の「違い」に焦点を当てている。しかしながら、まだまだ一般の社会心理学の理論の中では文化的普遍性について考察されることは少なく、心理的プロセスはどこの世界でも共通しているはずだ、と仮定されているようである。Betancourt & Lopez (1993) は、次のように懸念している。"主流の心理学の研究者は文化を理論や研究の中に取り入れることはほとんどなく、文化間の違いを研究している比較文化研究者は、行動に影響を及ぼすと考えられる文化の中の特定の側面や要因を同定できることが少ない。その結果、文化というものが何らかの心理的現象と関連がある、というところまではわかっても、その文化間の違いを引き起こしている要因は何なのか、ということは我々はあまりわかっていない"。

今回は、文化を研究している者として話題提供する機会を与えていただいたので、文化的要因を取り入れることによってどのようなことが得られるのか、それが社会心理学においてどのような意味を持っているかについて論じてみたいと思う。

文化のグループ分け

もしも、世界の文化の分類のためのフレームワークが全くなかったとしたら、非常に不便なことになるだろう。例えば、急にある国に赴任することになって、その文化がどんなものか知りたいと思っても、もしも文化の分類がなければその文化がどんなものなのか想像することも困難になってしまう。一つ一つの文化を個別に毎回検討するのは難しいし、手間がかかる作業である。

そこで、文化研究では、いくつかの文化をまとめてグループ分けしようとする。その一つの例が個人主義－集団主義の分類である。ある文化について知りたい時に、グループ分けができていてその文化がどこのグループに属しているかさえわかれば、ある程度文化について推測することができるし、その文化の人がどのような行動をとるか予測することができる。それによって、複雑な社会を理解するための認知の負担を減らすことができる。

よって、現状で行われていることは、文化間の違いを最大限に表現することができる尺度を作ろうとする試みである、と解釈することができる。その中で個人主義－集団主義という次元は最も頻繁に用いられているが、これが唯一の次元であるとは限らない。ひょっとしたら西洋－東洋という分類の仕方が先にあり、その違いを心理的プロセスで表すために個人主義－集団主義という次元が歴史的に用いられているのかもしれない。例えば、効率性などの別の次元を用いれば、アメリカと日本が同じグループになり、ヨーロッパ諸国がその対極になる可能性もある。そのような分類が意味のあるものであるかどうかは、研究者の問題意識が何であるかによるが、画一的な世界観を打破する、という意味では意義があるだろう。

文化研究のもたらすもの

では。文化研究によって、どのようなことが得られるのだろうか。

第一に、人の行動の予測ができる、ということがある。ある人がある文化に属しているとして、その文化の性質がわかっていれば、ある程度その人の行動を予測することができるだろう。他文化の人が、自分の文化の行動様式とまったくかけはなれた行動をしても、あわてなくてすむ。心理学の理論のめざすものの一つは人の行動の予測であると考えれば、このことは非常に重要な点である。

第二に、そして、より重要な問題として。文化間の社会心理学の理論のあてはまりを検討することができる。これまで、多くの研究は北アメリカやヨーロッパを起源として行われてきた (Amir & Sharon, 1987)。人間の心理プロセスは共通であって、これらの結果はそのまま他の国々にもあてはまると仮定されているかのように見える。しかし、人間の行動は本当にそのように普遍的なのだろうか。実際、いくつかの理論は他の文化ではあてはまらないということが報告されている。例えば、日本人を対象にした場合には、西洋の研究では頻繁に観察される自己高揚バイアスがほとんど

報告されていない（Kitayama & Karasawa, 1997)。また、Amir & Sharon (1987) は、アメリカでの実験結果は、イスラエルの被験者を対象にしたところ、半分以上が追試できないことを見いだした。

北アメリカやヨーロッパの結果がそのまま他の全ての文化にもあてはまると仮定することは、人間の多様性、文化の多様性を過小評価してしまう危険性がある。最初から「同じである」と仮定するよりも、「異なる」可能性も含めて、文化間での理論の普遍性を検討し、その違いがなぜ起こるかを考察する方が、より建設的に理論を構築できるだろう。

文化の問題は、「社会心理学の理論は普遍的なのか」という問いと関連がある。「違い」のみを見ている場合には、あまりにも文化間の差異が大きくて、普遍的な理論を構築するのは不可能に見えるかもしれない。けれど、その「違い」がなぜ生じるのか、を説明できるメタ理論が存在する場合には、心理学の理論をより文化的に普遍的なものに調整することが可能になるだろう。

第三に、文化の要因を心理学の中に取り入れることによって、「文化」についてより知識を深めることができる。国家間の交流が活発になり、文化について知ることの必要性が増してきた現代においては、心理学の視点から文化について理解を深めることが必要になってくると考えられる。

文化心理学と社会的アイデンティティ理論の関連

次に、既存の社会心理学の理論の中に文化的要因を入れた場合どうなるか、ということの例として、文化心理学と社会的アイデンティティ理論の関連について考察してみたい。

社会的アイデンティティ理論（e.g. Tajfel, 1978; Tajfel & Turner, 1979）では、自己概念には、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの二種類があると仮定されている。このうち、個人的アイデンティティとは、個人に特有の属性に関するアイデンティティで、「自分はおしゃべりだ」「自分は美人だ」といったものがそれにあたる。社会的アイデンティティとは、何らかの集団に属することから生じるアイデンティティであり、「自分は○○大学の教員だ」といったものがそれにあたる。この二つのアイデンティティは独立ではなく、連続的な次元の二つの極として定義されている。個人はこの連続次元上のどこかに位置し、状況によってその位置がシフトする。社会的アイデンティティ理論では、シフトすることによってどのような行動の変化が生まれるかなど、自己概念と状況との相互作用による動的な関係に着目している。

文化心理学の分野では、Triandis（1989）は、Greenwald & Pratkanis（1984）の提唱した自己の四つの様相（Diffuse self, Public self, Private self, Collective self）のうち、Public self（公的自己）, Private self（私的自己）、Collective self（集団的自己）の三つの側面に着目した。私的自己というのは、自分のユニークな属性に関する自己で、個人的アイデンティティの概念と共通している。集団的自己とは、準拠集団の中の自己と定義されており、これは社会的アイデンティティと関連がある。この三つの自己はそれぞれ独立であると仮定されており、どの自己の側面が優勢であるかによってその人の行動や認知が変わってくる。そして、文化が自己を育むので、どの自己の側面がよりサンプリングされるかという確率は、文化によって異なっている。Yamaguchi (1994)の集団主義の定義も、私的自己と集団的自己の目標のどちらが優先されるか、という二つの自己の側面の相対的優位性に着目している。このように、文化心理学では、文化の自己に対する影響という、比較的長いスパンのプロセスに焦点をあてており、その場の状況という一時的要因はあまり取り入れられていない。

このように、文化心理学と社会的アイデンティティ理論という一見全く異なった二つの理論は、「個人と集団の優越性」という非常に似通った問題を扱っている。異なる点は、社会的アイデンティティ理論では、状況による変化という短期的なプロセスを問題にしており、文化心理学では、文化という要因による違いという長期的プロセスに着目している点である。しかし、残念ながら、この二つの理論を結びつける試みはこれまであまりなされていない。その試みの一つとして、Brown et al (1992) は、集団のオリエンテーションの違いによる社会的アイデンティティ理論のあてはまりを検討した。その結果、CollectivisticでRelationalな集団において社会的アイデンティティ理論のあてはまりがいいことを見いだした。ただし、Triandis (1989) は、Tajfel (1978) の社会的アイデンティティ理論は個人主義的であり、多くの集団主義的社会では、自分の準拠集団を選ぶことができないと論じている。その点で、集団主義社会と個人主義社会では、「集団」の持つ意味が異なる可能性がある。

もし、Brownらのようにこの二つの理論の関連性を調べることができれば、どちらの理論にとっても非常に興味深い結果となるだろう。社会的アイデンティティ理論にとっては、文化間でのあてはまりを体系的に調べることによって、より理論の普遍性を高めることができる。文化心理学にとっては、「状況」との相互作用という視点を文化と自己の関係の中に取り入れることができる。

文化と状況

文化と状況の関連については、ワークショップの中

でも活発に議論された。一つの議論は、文化心理学においては、文化間で何らかの差が見出された場合にはそれはすぐに「文化の違い」として帰属されてしまい、状況によって説明しようという観点がない、ということだった。確かに、文化研究において、行動の差を状況によって説明しようという試みはあまり行われていない。ここで問題となるのは、何を状況、何を文化として定義するかである。なぜなら、ある社会の中での状況は文化によって作り出されたものである、ということを考えれば、状況と文化は単純に切り離せるものではない。また、状況をある人をとりまく環境、と定義すれば、どの文化に住んでいるか、ということも状況の一つと言えてしまう。

では、どのような定義をするのがこの場合にふさわしいのだろうか。ここで原点に戻ってみると、文化研究において探求したいのは、単に文化によってどのように行動が違うか、ということだけではなくて、文化の中のどのような要因がその違いを生み出しているか、ということである。それならば、状況を文化の中の一つの要因として定義してみれば、状況を含む様々な要因の相対的影響を検討することができる。この場合、文化とは様々な要因を含む人々の価値観、行動様式の複合体であり、状況はその中で場面によって変化する比較的短期的な要因ということになる。 状況と文化のどちらが影響しているのかという二者択一で論じるよりも、状況と自己観の違いの相互作用など、複合的要因の相対的影響を考慮した方が、より普遍的なメタ理論を構築するために貢献するのではないだろうか。そして、文化研究の中に状況要因を取り入れることは、純粋に文化に特有な要因を同定するのに役立つだろう。

結語

我々は、人間はどこでも同じだと仮定すべきなのだろうか、それとも異なると仮定すべきなのだろうか。もし、まったくどこでも同じならば、文化を研究する必要はないだろう。それならば、心理学の理論は他文化ではあてはまらないのではないかと心配する必要はなくなる。しかし実際には、ある国での結果は他の国にはあてはまらないという報告があちこちから出てきている。もし違っているのならば、そしてその違いにこだわるのならば、文化の研究は必要だと言えるだろう。

もし違うということだけがわかっていて、なぜ違うのか、どのように違うのかということが全く解明されていなければ、西洋と東洋の心理学は分断されてしまう。日本で何らかの実験結果が得られて、それがこれまで西洋で確立した理論と一致しなかった場合には、単なる実験の失敗か一つの特殊な結果として葬り去られてしまうことになる。もし、文化を科学的に研究することができれば、このような問題を回避することができる。 なぜ文化間の違いが起きるのかを説明するメタ理論があり、違いを引き起こす文化内の変数が同定できれば、文化間で普遍的な理論を構築することが可能となるだろう。

文化による理論のあてはまりを検討することは、理論の外的妥当性を検討することになる。心理学の実験において内的妥当性が議論されることはしばしばあるが、文化的な外的妥当性が問題になることはめったにない。しかし、一つの文化内では妥当な理論であっても、それが他の文化で妥当であるとは限らない。外的妥当性の検証は、社会心理学がさらに科学的な学問となるためには必要なプロセスであるだろう。

もう一つ指摘したいことは、比較文化研究では、文化間の共通性よりも違いに着目することが多い、違いの方が議論しやすいということもあるが、社会的カテゴリー化理論（e.g. Tajfel, 1959, 1981）で提唱されているように、人間は外集団が存在する場合には集団間の差異を強調する傾向がある。このことによって、文化を研究する際にも、実際以上に違いを強調してしまう危険性がある。文化の研究者は、このようなバイアスがあることを念頭に置く必要があるだろう。また文化間で状況などの様々な要因が異なる中で、共通の部分があるということは、違いが存在することと同様あるいはそれ以上に、重要な点であるといえるだろう。文化間で理論のあてはまりに違いがなかったとしたら、異なる状況下でもそのプロセスは変化しないということを意味し、理論の頑健性を証明することになる。今後の文化研究では、文化間の差異だけでなく、普遍性を洗い出すことが理論の発展に貢献することになると期待したい。

最後に、文化の要因を取り入れることは、文化間で実験条件以外の要因を統制することが難しいなど、常に様々な問題を含んでいる。本稿ではあえて問題点を取り上げず、文化研究の意義のみを論じたが、それはワークショップの意図に沿って論点を明確にするためであり、決して問題点を軽視するものではないことをご理解いただければ幸いである。

謝辞

企画者の沼崎先生をはじめ、司会者の遠藤先生など本ワークショップでの発表の機会を与えて下さった関係者の皆様、ワークショップ中に興味深い議論を展開して下さった高野先生、工藤先生、高田先生、及び有益なご示唆を下さいました諸先生方に深く感謝の意を表します。本ワークショップでの発表は、文化について理論的に考えなおす機会となり、良い勉強をさせていただきました。

引用文献

Amir, Y., & Sharon, I. (1987) Are social psychological laws cross-culturally valid? Journal of Cross-Cultural Psychology, 18, 383-470.

Betancourt, H., & López, S.R. (1993) The study of culture, ethnicity, and race in American psychology. American Psychologist, 48, 629-637.

Brown, R., Hinkle, S., Ely, P., Fox-Cardamone, L., Maras, P., & Taylor, L. (1992). Recognizing group diversity: Individualist-collectivist and autonomous-relational social orientations and their implications for intergroup processes. British Journal of Social Psychology, 31, 327-342.

Greenwald, A.G., & Pratkanis, A.R. (1984) The self. In R.S. Wyer & T.K. Srull (Eds.), Handbook of social cognition (Vol.3, pp. 129-178). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997) Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. Personality and Social Psychology Bulletin. 23, 736-742.

Tajfel, H. (1959) The anchoring effects of value in a scale of judgements. British Journal of Psychology, 50, 294-304.

Tajfel, H. (1978) Differentiation between social groups. London: Academic Press.

Tajfel, H. (1981) Human Groups and Social Categories. Cambridge: Cambridge University Press.

Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979) An integrative theory of social conflict, reprinted in Austin, W. & Worchel, S. (Eds.) The Social Psychology of Intergoup Relations, 2nd edn, 1985. Chicago: Nelson Hall.

Triandis, H.C. (1989). The self and social behavior in differing cultural contexts. Psychological Review, 96, 506-520.

Yamaguchi, S. (1994) Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim, H.C. Triandis, C.Kagiticibasi, S.C. Choi & G.Yoon (Eds.), Individualism and colletivism: Theory, method, and applications. Thousand Oaks, CA: Sage. Pp.175-188.

II-5

対人行動学研究

第 16 巻
平成10年6月

第18回研究発表記録

ワークショップA 「社会心理学において文化的要因を取り上げる意義」 …… 1
ワークショップB 「社会的認知研究の最近の動向」 …… 15
ワークショップC 「社会心理学における感情研究の方法」 …… 24

情 報

<ゼミ・研究会紹介00>
一橋大学 大学院 村田ゼミ …… 31
<研究紹介>
大坊郁夫 英国、York大学の心理学事情 …… 34

書 評

土田昭司
松井豊（編）「悲嘆の心理」 サイエンス社 1997年 …… 37

会 報 …… 39

対人行動学研究会